

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

序章 アンデスへ：問題の所在と研究方法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 紀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008934

序章 アンデスへ

—問題の所在と研究方法—



1968年10月、私のはじめてアンデスの土地を踏んだ。それ以来、約50回アンデスで調査をおこなった。写真は2回目の調査（1970年10月）でボリビア南部高地に向かうところ

1 何が社会を変えたのか

アンデスに人類が姿をあらわしたのは、今から1万年あまり前のことであった。彼らはアジア大陸からベーリング海峡を渡り、アメリカ大陸を南下してアンデスに到達した人びとであった。その彼らは未だ農耕を知らず、狩猟採集で暮らしを立てていたと考えられている。したがって、栽培植物も家畜もなく、食糧源はすべて野生の動植物であった。しかし、その後、このような暮らしは大きく変わった。その暮らしを、先住民以外ではじめて目にしたのは、16世紀にアメリカ大陸にやってきたヨーロッパ人たちであったが、当時、アメリカ大陸で見られた文化の多様性はまさに驚くべきものであった。狩猟や採集漁労などを主たる生業にする地域がある一方で、いくつかのタイプの異なる農耕をおこなう地域もあった。社会の型で見ても、バンドをはじめとして、部族社会や首長制社会、さらに国家社会さえもあった。

とくに、インカ帝国を征服したピサロたちスペイン人の一行はアンデスで目にしたもの大きく目を見張った。インカ帝国の首都のクスコは、人口が20万を擁する大都市であり、そこには数多くの美しい建造物があったからだ。また、このクスコには神殿や住居のほかにも多くの巨大な倉庫もあった。そして、これらの倉庫には、食糧をはじめとして帝国の各地から集められた毛布や金属器、衣料、武器などがふんだんに貯蔵されていたのである。

では、このような変化を生んだのは何であったのか。この疑問に答える前に、別の民族集団についてのヨーロッパ人による記録も紹介しておこう。博物学者として知られるイギリス人のチャールズ・ダーウィンがビーグル号に乗ってパタゴニアを訪れたときの記録である。

「夜には、五一六人が裸のまま、この凄じい風土の雨にも風にもほとんど保護されずに、獣のように丸くなって、濡れた地面に眠っている。低潮の時は、冬でも夏でも、夜でも昼でも、岩から貝を削ぎとるために起きねばならない。女はうにを採りに海に潜るか、または独木舟の中に辛抱強く座りこんで、髪の毛に釣針もないのに餌をつけて、小魚を急に引っ張り上げている。あざらしが殺されるか、あるいは腐敗したくじらの死骸の漂流を見つければ、それこそは祝宴である。こんなみすばらしい食物に、少しばかりの味のない果物やきのこの類が補われている。彼らはしばしば飢饉に悩まされる」。[ダーウィン 1960: 63]

引用がいささか長くなったが、これはインカ帝国の滅亡後から約300年も経た時代の狩猟採集民の暮らしの貴重な記録だからである。もちろん、狩猟採集民のすべてがこのような悲惨な生活を送っていたわけではないだろうが、その社会は遊動的な居住集団のバンドであり、野生の食糧源を追って季節的に移動をくりかえした暮らしを送っていた。バンドは本質的には家族の集合体であり、最も未発達な段階の社会組織であるとされ、

本格的な社会の発達には農耕または牧畜の開発を待たなければならない。つまり、食糧の採集や狩猟から食糧の生産への変化こそが、社会に大きな変化を与えたと考えられているのである。

その背景には、農耕が大きな人口を支える力を潜在的にもっているという事実がある。この点についてベルウッドは、次のように述べている。

「一般的に、狩猟採集民が生業をたてるに際して一世帯あたりに必要とするテリトリーが数平方キロメートルにおよぶのに対して、平均的な焼畑民なら、一世帯あたり数ヘクタールの土地があればなんとかやっつけていけるだろう。灌漑農民の世帯であれば、通常一ヘクタール未満である。すなわち、生産性が向上するにつれて、世帯や個人が食べていくのに必要な土地はちいさくてすむようになる」。[ベルウッド 2008: 20]

こうして食糧の採集から生産への変化はアンデスにかぎらず、世界の各地でおこったが、それは人類の歴史においてきわめて大きな意味をもつものであった。そのため、この変化を考古学者たちは「農業革命」あるいは「食糧生産革命」と呼んでいる。

それでは、食糧の採集から生産への変化は具体的には人びとの暮らしにどのような変化をもたらしたのであろうか。この点について、考古学者のサンダーズは次のように3つにまとめている [サンダーズ 1972: 94-96]。

- ① 食糧採集は季節的な人口移動を必要とするのに対して、食糧生産は定住化を促進し、定住の地理的範囲をいちじるしく拡大する。
- ② 食糧の採集や狩猟の体系では、最も生産性の高い環境にあってさえ、食物の量が季節的に、また年ごとに大きく変動するので、人口は最低のレベルでのみ安定する傾向がある。一方、食糧生産体系では、生産される食糧の全体量は大幅に増加し、その結果、人口密度の潜在的可能性が増大する。
- ③ 食糧生産は、食糧供給を達成するのに必要な時間の総量を減少させる。その結果、生まれた余剰時間は、経済、社会、政治、宗教など、いろいろな活動にあてることができる。

ただし、これらはあくまで一般的な傾向であり、必ずしも食糧採集や食糧生産がこの指摘どおりであるとはかぎらない。たとえば、③の「食糧生産は、食糧供給を達成するのに必要な時間の総量を減少させる」とはかぎらず、食糧採集の方が農耕よりも余剰時間があるという指摘もある [サーリンズ 1984 (1972)]。また、食糧の採集から生産への変化は、「革命」と呼べるほど急激な変化ではなく、きわめて長い年月を要したことも指摘されている。

いずれにしても、食糧の採集から生産への変化、つまり農耕の誕生は人間の社会に大きな変化を与えたことは間違いない。さらに、農耕の発達は豊かな食糧の供給を可能にするだけでなく多数の人口の維持も可能にし、その社会の階層化への刺激ともなる。も

もちろん、豊かな食糧が供給されたからといって、必ずしも社会の階層化がおこるわけではない。ましてや、豊かな食糧が生産されたからといって必ずしも文明を生むわけでもない。つまり、豊かな食糧の生産は文明成立の十分条件でないが、必要条件であることは間違いないであろう。

2 知られざるアンデスの農耕文化

では、アンデスの農耕はどのようにして始まり、どのように発達し、その農耕はどのような特色をもっているのでしょうか。じつは、これがほとんど知られていないのである。たしかに、断片的な情報はあるものの、体系的な研究は皆無といっても過言でない。アンデスは、インカ帝国に象徴されるように高度な文明を築きあげた地域であるが、アンデス文明を支えた農耕についての研究はきわめて乏しいのである。

その理由がいくつか考えられる。まずもって考古学的可視性 (archaeological visibility) についての問題を指摘しておかなければならない。農耕の起源や動植物のドメスティケーション (家畜化・栽培化) は考古学からの貢献を待たなければならず、実際に、これまで農耕の起源や動植物のドメスティケーションの研究では考古学が先導的な役割を果たしてきた。とくに、西アジアではチャイルドやブレイドウッドなどが発掘をもとにして魅力的な仮説を発表、農耕や牧畜の起源に関する知見も考古学者によって蓄積されてきた [Braidwood 1960; ブレイドウッド 1969; Child 1952]。

しかし、近年になって問題視されるようになったのが考古学的可視性である。これは、簡単にいえば、動植物のドメスティケーションでは、そのプロセスのもつ考古学的可視性、すなわち考古学的資料をとおしての「見えやすさ」「追跡しやすさ」が大きく異なることである。このため、たとえば貧弱な物質文化しかもたず、小型かつ短期的な居留地を転々とする遊牧的牧畜民の動向を考古学では十分に把握できなかったのである [藤井 2009]。

この考古学的可視性は主として西アジアで問題にされてきたが、これは本稿で対象とするアンデスでも検討されなければならない問題である。むしろ、アンデスの方でこそ、この考古学的可視性についてはより問題視されなければならない。それというのも、西アジアでの主な栽培植物は麦類であるため遺物として残りやすく、考古学的にも「見えやすい」からである。一方、アンデスは、後述するように主な食糧源となる栽培植物は穀類だけでなく、多種多様なイモ類もある。ところが、イモ類は水分を多く含んでいるため腐りやすく、また食べればあとにほとんど何も残らない。さらに、イモ類を収穫するための道具は掘り棒であったと考えられるが、これも木製であったせいで残りにくい。つまり、アンデスにおけるイモ類の利用や栽培に関する考古学的資料はきわめて乏しく、考古学的にはきわめて「見えにくい」ものなのである。

農耕の起源やドメスティケーションに関する研究には、もうひとつの大きな問題がある。それは、遺物の残りやすい乾燥地帯に発掘が集中してきたことである。実際に、農耕の起源に関して大きな貢献を果たしてきた西アジアの遺跡はまさしく乾燥地帯に位置している。また、本稿で対象とする中央アンデスでも、発掘は主として砂漠に位置する海岸地帯でおこなわれてきたが、主要な栽培植物のほとんどが海岸地帯ではなく、雨季に降雨をみる山岳地帯を起源地とするのである。

このような状況に加えて、アンデス考古学では農耕や牧畜などの生業が注目されなかった、もうひとつの背景がありそうである。それは、アンデスでは古くから神殿が多く造られたせいで、考古学者の目が農耕や牧畜よりも神殿の方に注がれたことである。また、この神殿からはしばしば黄金製品も出土し、それも神殿に目を注ぐことに拍車をかけたようである。もちろん、アンデス考古学者の中にも農耕や牧畜の起源などに関心をもち、研究を進めてきた研究者もいる。しかし、それは脚光を浴び続けてきた神殿などの研究の中では主流にはなりえず、研究者の数も乏しい。

こうして、アンデスの農耕の特色はあまり知られず、その状況は今なお大きな変化がないのである。

3 トウモロコシ農耕がアンデス文明を生んだ？

上記のように、アンデスにおける農耕文化の研究はきわめて乏しい。ところが、それにもかかわらず、アンデス文明はトウモロコシ農耕によって生まれたとする説が広く流布している。それを象徴するものが、日本で使われている高等学校の歴史教科書の記述である。そこで、この問題について教科書でどのように記述されているか、参考までに紹介しておこう。なお、教科書はいずれも2000年版である。

「アメリカ大陸には、ベーリング海峡がまだアジア大陸と地続きであった古い時代に、モンゴロイド系と思われる人々がわたり、やがてトウモロコシ栽培に基礎をおく独特の文明をつくりあげた」。

これは、山川出版社から刊行されている3種類の教科書のうちのひとつ、『高校世界史』のなかの記述である。この記述どおり読めば、アメリカ大陸ではトウモロコシ栽培に基礎をおく独特の文明がつけられたことになる。たしかに、アメリカ大陸ではトウモロコシ栽培に基礎をおく文明が生まれた地域もある。たとえば、メキシコを中心とするメソアメリカはトウモロコシの原産地であり、その後トウモロコシ農耕が発展し、それを基盤としてマヤやアステカなどの文明が成立したことが知られている。

しかし、古代アメリカ文明のもうひとつの発祥地であるアンデスでも古代文明はトウモロコシ栽培を基礎に築かれたのであろうか。それとも、上記の記述にはアンデス文明

は含まれていないのであろうか。どうもそうではなさそうである。これは、同じ山川出版社から刊行されている残りの2種類の教科書を見れば明らかである。その部分を引用しておこう。

「スペインによる征服以前の南大陸には、2つの文明が栄えていた。メキシコ高原のアステカ文明と、アンデス地方のインカ文明である。(中略)両文明の共通点は、トウモロコシ栽培を主とする農業を土台としていたことであり、(後略)」。([改訂版 世界の歴史])

「……前一〇〇〇年ころから北部アンデス地域にチャビン文化が成立して、灌漑によるトウモロコシの栽培が普及し、大小の王国が興亡したが、一五世紀後半にはエクアドルからチリにおよぶ広大なインカ帝国が成立した」。([改訂版 詳説世界史])

つまり、山川出版社から刊行されている教科書ではメキシコだけでなく、アンデスでも古代文明はトウモロコシ栽培に基礎をおいて成立、発達したとはっきり記述されているのである。そして、これは山川出版社だけでなく、他社の教科書の記述もほぼ同様である。つまり、大半の高等学校で「アメリカ大陸の文明はトウモロコシ栽培を基礎に成立、発達してきた」と教えているのである。

それでは、このような考え方はどのようにして生まれたのであろうか。歴史教科書の執筆方法については明らかではないが、おそらく教科書の執筆者たちは日本人研究者の説にしたがっているのであろう。実際に日本人研究者たちも例外なくアンデス文明のトウモロコシ基盤説を主張しているのである。たとえば考古学者の狩野は著『中南米の古代都市文明』の冒頭で次のように述べている。

「アメリカ大陸における『文明の曙』は、トウモロコシ農耕とともに始まる」。[狩野 1990: 1]

また、やはりアンデス考古学者の松本も次のように述べている。

「メソアメリカとアンデス両地域の文明は、トウモロコシやマメ、カボチャ類を栽培する農耕社会にその基礎を置いていた」。[松本 1992: 179]

この説は先に紹介した教科書の大半の記述とほとんど同じである。同様の意見を民族学者の佐々木も次のように述べている。

「……、メソアメリカと中央アンデス地域を含む核アメリカ (Nuclear America) 地域の文明は、トウモロコシを主作物とする雑穀栽培型の農耕 (トウモロコシほかにインゲンマメ、ライマメ、落花生などのマメ類とカボチャ類、それにワタ、トウガラシ、タバコその他の作

物が加わって特色ある作物複合体をつくる)に支えられて発展したものである。(中略)中央アンデスにおいても前4000年紀から前3000年紀にかけて、この種の農耕が発展した」.[佐々木 1998: 86]

もちろん、トウモロコシの重要性を指摘しているのは、日本人研究者にかぎらない。欧米の研究者にも少なくなく、おそらく日本人研究者は彼らの意見に追随しているであろう。ここでは、比較的最近にこの問題に言及している研究者の言葉を取り上げておこう。世界的に有名な考古学者のベルウッドも次のように述べているのである。

「先史時代後期のアメリカにおける農耕文化のなかで、先史考古学的にみても、トウモロコシは生業の基本であった」.[ベルウッド 2008: 238]

4 「穀物中心史観」の真偽

先述したように、アンデスの農耕に関する研究は十分ではなく、むしろ乏しいといった方が良い。にもかかわらず、多くの研究者はアンデス文明の基盤になったのはトウモロコシ農耕であったと主張している。では、これは何に基づいているのであろうか。

そのひとつの要因が、先述した考古学的可視性に関する問題であろう。トウモロコシは、穀粒が固く、その芯も食べられないため、考古学的遺物として残りやすく、遺跡でも「見えやすい」のに対し、イモ類は先述したような理由で残りにくく、考古学的に「見えにくい」からである。さらに、アンデスではトウモロコシを重視する歴史的な記述が多く、これも見逃せない要因であろう。周知のように、アンデスではスペイン人の到来まで文字が知られていなかったため、文字による歴史資料はスペイン人たちによるものがはじめてである。そして、彼らの記録のなかにトウモロコシを重視する記述がきわめて多いのである。

そして、この「トウモロコシ中心史観」は従来の「穀物中心史観」にとっても都合のよいものであった。この点で、文化人類学者である江上による次の指摘は象徴的である。彼はメソポタミアとアンデス文明の比較をしながら、次のように述べているのである。

「……両者における文明の発展の形式は、各段階を通じて巨視的にみれば、確かに驚くほど類似している。勿論そこには、農耕村落の形成以後の段階においてメソポタミアでは主要な栽培植物が麦で、アンデスではそれがトウモロコシというような違いは多々ある。しかし、このような相違は、むしろ類似とみるべきものである。すなわち、麦とトウモロコシはともに穀物であるという点で、長期の保存に適し、しかも収量が多いという共通な特性を有し、両者ともに永続的な主食となりえたので、人類の経済生活上に果たした役割は本質的に等しい」.[江上 1986: 76]

このなかでも、トウモロコシは「穀物であるという点で」、「長期の保存に適し」、「永続的な主食となりえた」という点は注目すべきであろう。これを江上は別の箇所でもっと明確に次のように述べているからである。

「穀物農耕は、人間の集落を農村から都市まで発達させた唯一無二の経済的要因であった。というのは、芋農耕、野菜農耕、果物農耕など、また羊、山羊、牛、豚などの肉畜の飼養など、いわば非穀物農耕や牧畜の生産経済では、一万人以上の人口を一緒に集住させ、生活させることはほとんどまったく不可能であって、都市の成立はそこではありえないからである」。〔江上 1986: 55〕

これとほぼ同じ意見を比較文明学者の伊東も次のように述べている。

「……要するに農耕社会から文明社会が形成されてくるためには、蓄積可能な穀物生産による余剰農産物の存在が前提となる。この余剰農産物によって、直接農耕にたずさわらない人口を生みだしたところに、都市文明が開花してくるのである。つまり、穀物農耕こそ、文明社会成立の必須の基盤であるということになる」。〔伊東 1988: 110-111〕

このように2人とも穀物農耕こそが文明発達の必要条件であると主張している。たしかに古代文明との関連で穀物農耕が重要視される大きな理由がある。それは以下のようなものである。主食となる作物は、ふつうカロリー量の大きい穀類かイモ類であるが、両者を比較した場合、穀類は次のような点で優れているとされる。すなわち、穀類の穀実はよくつまって乾いており、貯蔵や輸送に適している。また、栄養の上でも穀類は炭水化物のほかに脂肪、たんぱく質、無機物を含む。一方、イモ類は炭水化物は多く含むが、ほかの成分は一般に少ない上に、水分を多く含むため重く、また腐りやすい。

こうして、文明社会成立の基盤としてのイモ類の農耕は否定され、アメリカ大陸でもトウモロコシ農耕が古代文明の基礎になったと考えられるのであろう。アメリカ大陸で栽培化された、ほとんど唯一の穀類といえる作物がトウモロコシだからである。たしかに、マヤやアステカを生みだしたメソアメリカ文明はトウモロコシ農耕を基礎に成立したと考えられている。また、伊東たちが例にあげているメソポタミア、エジプト、インダス、中国なども穀物農耕を基礎に文明社会が誕生したのであろう。そして、アンデス文明もこれらの例にもれないというのが従来の考え方であった 〔Mangelsdorf and Reeves 1939: 282; Kidder 1962: 457-463; Kidder, Lumbreras and Smith 1963〕。

5 私の視点

このような従来の説に私は疑問を呈してきた。その考えを最初に発表したのは1976年のことで、これはアンデス高地における食糧としてのジャガイモの重要性を指摘したも

のであった。さらに、1982年にも「中央アンデス高地社会の食糧基盤」と題する拙文を
発表、そこでもジャガイモの重要性を論じた。しかし、これらの考えは必ずしも受け入
れられなかった。とくに、考古学者にその傾向が強かったが、これは誤解によるところ
が大きいと私は判断している。というのも、考古学者たちは、私がトウモロコシの重要
性を否定し、ジャガイモの重要性のみを強調しているかのように受け取っていたからで
ある。

しかし、私は決してそのようなことは述べていない。実際に、後者の本文中でも「要
するに、私が強調したいのは、中央アンデス高地社会におけるトウモロコシの重要性を
否定することにあるのではなく、食糧としての根栽類（イモ類）の重要性を提示するこ
とにある。従来の研究が、トウモロコシ栽培を重視するあまり、根栽類栽培のもつ役割
を軽視しすぎていたきらいがあるからである」[山本 1982a: 119]と述べている。つま
り、これまでトウモロコシの貢献の陰に隠れて目立たなかったジャガイモなどのイモ類
の重要性に光をあてようとしたのであった。

この論文では、トウモロコシに関してもうひとつ指摘したことがあった。それは、し
ばしば酒の材料として利用されることに象徴されるように、トウモロコシはアンデスで
は儀礼的・宗教的な色彩の濃い性格をもつ作物であるということであった。また、食糧
としてのトウモロコシは、インカ時代には主として貴族や神官、官僚、兵士たちなどイ
ンカ帝国の一部階層によって利用されていた可能性も指摘した。

このようなことを考えるに至ったこと背景には2つの理由がある。そのひとつは、
1968年から10年あまりのあいだに数度のアンデス調査をおこない、その観察結果からト
ウモロコシは基本的に標高がおおよそ3000mあたりまででしか栽培されておらず、それ
よりも高地部ではジャガイモをはじめとするイモ類栽培が圧倒していたことを知ったか
らである。また、先住民の人たちと食住をともにしての観察から、彼らの食事の中心は
トウモロコシではなく、圧倒的にジャガイモを中心とするイモ類であることも知ったの
である。

もうひとつの理由は、トウモロコシの起源に関する研究の進展のおかげである。トウ
モロコシの起源は長いあいだ未解決であり、中米起源説だけでなくアンデス起源説もあ
った（たとえば、田中 1975）。そのため、当時はアンデスでもトウモロコシはきわめて
古くから栽培されていたと考えられており、それがアンデスにおけるトウモロコシ重視
説に影響していたようである。しかし、その後、トウモロコシのアンデス起源説はま
ったく否定され、今ではトウモロコシの中米起源説を疑う人はいない。そうであれば、ア
ンデスのトウモロコシは中米に由来するものであり、アンデスにおけるトウモロコシ導
入以前は他の作物が栽培されていたに違いないということになる。そして、それは少な
くともアンデス高地部ではジャガイモをはじめとするイモ類であると私は判断したので
あった。この考えにしたがって発表した論文が、先述した山本 [1982a] であった。

このあと10年あまりたって考古学者の Bruhuns も、私の主張とほぼ同じようなことを著書の *Ancient South America* [1994] のなかの「トウモロコシの問題」と称する章で次のように述べている。

「アメリカ大陸の先住民の人々によって栽培化された数多くの植物の中で、トウモロコシほど研究者の関心をひきつけたものはない。先住民の生業にとってジャガイモ (*Solanum* spp.) やマニオク (*Manihot esculenta*)の方がおそらくより重要であったが、トウモロコシはアメリカ大陸におけるすべての進んだ文化的発展の鍵になったとみなされていた。それというも、トウモロコシは穀物であり、西洋の農業は主として穀物をベースにしているからである。また、トウモロコシ農耕がきわめて重要であったメソアメリカでの先史研究や古代経済の研究が先行していたため、研究者たちはメソアメリカにおける農耕の発展モデルをまったく異なった大陸である南アメリカにもあてはめようとしたのである」。[Bruhuns 1994: 89]

この文章の中で、Bruhuns は「先住民の生業にとってジャガイモやマニオクの方がおそらくより重要であった」と述べているが、私が問題視していたのは、まさしく、この点にあった。すなわち、一般の農耕民にとって何が主作物であり、何が彼らの生活を支えていたのか、ということであった。いみじくも、Bruhuns が「おそらくより重要であった」と述べているように、先住民の生業にとって何が主作物であるかという問題が明らかにされないまま、トウモロコシの役割のみが重視されてきたのである。そのため、1983年に発表した「植物の栽培化と農耕の誕生」でも、さらに2004年の単著『ジャガイモとインカ帝国—文明を生んだ植物』でも、私はアンデスにおけるジャガイモの重要性について述べたが、そのつど考古学者たちからは批判があった[関 1995: 54-78; 2007; 大貫 2005; 2006: 83-84]。

これらの考古学者の批判から浮かび上がってきた点を明らかにしておきたい。それは、考古学者と民族学者の視点が大きく異なっていることである。先述したように、アンデス考古学者の多くは神殿に関心をもつため権力や政治などに大きな関心があり、その視点はエリートや権力者の方に向いてきたし、現在もそうである[加藤・関 1998; 関 2006; 大貫・加藤・関 2010]。一方、民族学者としての私の視点はエリートたちよりも一般の農民の方に重心がある。そして、異文化の中に入ったとき、まず衣食住に関心をもつのは民族学の基本である。とくに、私は農耕文化に大きな関心をもっているため「主食が何であるか」ということを問題にしてきたのである。

ここで念のため、主食という言葉について定義しておこう。食糧生産の最初の段階は様々なものを食糧源にしていたであろうが、農耕を基盤にした社会では、ひとつ、あるいは2、3の栽培植物が人口の大部分に対して食糧の大半を供給するようになる。これが主作物と呼ばれるものであり、これから必要カロリーの大部分がとられるようになる。そして、これが主食と呼ばれるものであり、この主食のほとんどが穀類かイモ類なので

ある。

では、なぜ主食に注目するのか。これについても少し述べておこう。主食になる栽培植物の栽培のためには大きな労働力が必要とされるが、このことが農耕システムや人口支持力、労働のあり方、環境との相互作用など、当該社会のあり方にも大きな影響を与えるのである。ただし、私は必ずしも何が主食であるかということだけを問題にしているわけではない。アンデスで重要な作物となっているジャガイモなどのイモ類とトウモロコシのもつ役割や意味を探り、それがアンデスの農耕文化、ひいてはアンデス文明にどのような影響を与えたのかということも本書で明らかにしたい。

ただし、このような私の視点は、アンデス研究ではいささか特殊かもしれない。そこで、以下にその視点のもとになっている考え方を述べておこう。

農耕の誕生は後述するように、植物の栽培化や動物の家畜化から始まると考えられるが、このプロセスでは権力者たちは存在しなかったか、存在したとしても栽培化や家畜化には関与しなかったはずである。栽培化も家畜化も、これらはアンデス住民が野生の動植物との格闘のなかで長い時間をかけておこなってきたと考えられるからである。また、農耕の誕生後も、その発達は、権力者ではなく、一般の農民の努力によるところが大きいだろう。彼らが土にまみれながら営々と作物を育てたり、家畜を飼育したりするなかで農耕は発達したと判断されるからである。また、農耕に関する技術、たとえば施肥、灌漑、農耕具の開発、食糧の貯蔵や加工、さらに労働組織なども、権力者たちではなく、主として農民自らがおこなったに違いない。そして、都市の発達や文明の誕生なども、権力者だけでなく、食糧を安定的に供給してくれる多くの農民の存在があったからこそであろう。

先に紹介した考古学者のブレイドウッドもこの点について次のように述べている。

「文明が成立するためには、多くの人間が必要である。文明が成りたつためには、どうしても一定数以上の人びとがいなくてはならないだろう。その人びとのうちのある者は田舎に住み、ある者は大きな町つまり都会に住む」。[ブレイドウッド 1969: 173]

これはきわめて当然のことであろうが、不思議なことにアンデス研究では田舎に住む大多数の農民に視線が向くことは少なく、ほとんどが町に住む権力者の方に向いていたのである。これは、クロニスタの名で知られる初期のスペイン人記録者たちの影響も大きいようだ。彼らのほとんどがインカ王やエリートに関心をもち、一般民衆に対する関心は乏しかった。実際に、クロニスタたちの関心はインカと密接な関係をもつトウモロコシ栽培に集中し、一般民衆が主食としていたジャガイモなどイモ類に対する関心は低かったのである。

このような動向に対して異を唱えたのがエスノヒストリーを専門とする Murra [1975] であった。彼は、17世紀および18世紀のスペイン人による記録を精査し、トウモロコシ

の重要性を強調する見方はインカ帝国征服時のインカの農業の現実を反映していないと批判した。そして、初期のクロニスタたちはトウモロコシを重視するあまりに、ジャガイモやオカ、オユコなどのアンデス高地のイモ類を過小評価していると結論づけたのである。

こうして見てくると、アンデスの農耕文化の特徴を明らかにするためには、考古学はもちろんのこと、エスノヒストリーや民族学などの成果も視野に入れなければならないことがわかる。さらに、農耕文化は植生や地形、気候なども密接な関係をもつため、地理学や生態学、農学などの成果も無視できない。すなわち、アンデスの農耕文化の研究のためには、一分野だけでなく、関連分野を総合した学際的なアプローチが必要なのである。

もちろん、このような学際的なアプローチを一人の研究者が遂行することはきわめて大きな困難が予想されるが、本研究ではあえて、それをおこなおうとする。それをしないかぎり、アンデスの農耕文化の本質が明らかにならないと判断されるからである。

6 研究方法および対象地域

それでは、アンデスの農耕文化の特色を明らかにするために、具体的にはどのような方法をとればよいのか。まず、アンデスはきわめて広大な地域なので、研究対象地域の焦点をある程度絞らなければならない。その地域とは、ペルーからボリビアにかけての中央アンデス、とくにその高地部である。

中央アンデス、とくにその高地部に焦点を絞る理由は以下のとおりである。

- ①アンデスのなかで、中央アンデスは農耕の起源地と考えられること。
- ②中央アンデス、とくにその高地部は数多くの栽培植物の起源地であること。
- ③栽培植物や農耕の起源に関する考古学的証拠が豊富なこと。
- ④農耕文化に関するクロニカ資料が比較的豊富にあること。
- ⑤現在も伝統的な農耕文化の色彩が色濃く見られること。

ただし、同じ中央アンデスの中でも、地域的な偏りは大きい。たとえば、③は主として乾燥した砂漠地帯に集中しているのに対し、⑤は山岳地域、とくにその高地部において顕著である。

また、私は考古学者ではなく、民族学を専門とする研究者なので、本研究では⑤に注目し、中央アンデスの高地部に焦点をあてる。しかし、アンデスの農耕文化は長い歴史があり、その歴史を無視するわけにはゆかない。また、その歴史と照らし合わせることによってアンデスにおける農耕文化の全体像にも迫れる。とくに、インカ時代やそれ以

前のプレインカ時代については、民族学的手法では限界があり、クロニカ資料や考古学的資料を最大限に活用する。また、私は北はコロンビアから、エクアドル、ペルー、ボリビアを経て、南はアンデス最南端のチリやアルゼンチンのパタゴニアまでのアンデスのほぼ全域を踏査したが、このような広域踏査をとおしてアンデスにおける環境や文化、生業などの地方的特色の把握に努めた。この広域踏査と並行して、数カ所では定着調査も実施した。とくに、ペルー南部のクスコ県マルカパタ地方では、通算で約2年間現地に住みこみ、先住民たちと暮らしをともにしての定着調査もおこなった。

図序-1はアンデスの中で最も長期にわたりフィールドワークを実施した中央アンデスおよび北部アンデスにおける踏査ルートである。このほか、コロンビアやボリビアでは、アマゾン川流域でも、それぞれ3カ月ほどの調査を実施したが、この図では省略してある。

上述のように、本研究では、中央アンデスの高地部に焦点をあてるが、北部アンデスや南部アンデスも視野に入れる。農耕は、自然環境と密接な関係をもっており、中央アンデスの農耕文化の特色を明らかにするためには、その環境の特色も知らなければならないからである。この点で、中央アンデスを北部アンデスや南部アンデスと比較することは当該地域の特色をより明らかにできると判断されるのである。

この研究のもとになるデータは、主として1968年以来約50回、現地滞在が約10年におよぶフィールドワークで得られたものである。また、このフィールドワークでは、できるだけ「自分の足で歩き、自分の目で見て、自分の頭で考える」ことをモットーにした。とはいえ、「自分の目で見る」ことには限界がある。そのため、文献資料にも可能なかぎり目をとおすようにした。しかも、私が専門とする民族学だけでなく、考古学や歴史学、さらに地理学や生態学など関連分野の資料にも目を配った。とりわけ、考古学的資料の乏しいインカ時代に関しては、クロニカ資料に全面的に依存せざるを得なかった。

幸いに、この40年ほどのあいだに、アンデス文明に関する研究は諸分野で飛躍的な発展をとげた。植物学の分野では、トウモロコシが中米の原産であることがほぼ確定的となった。考古学の分野でも、遺物として残りにくい栽培植物にかかわって、人骨などで古い時代の食生活を復元する新しい手法が開発された。歴史学の方では、植民地時代の地方文書の分析からインカ時代の人びとの暮らしもかなり明らかになってきた。また、民族学（文化人類学）の分野では数多くの研究者がアンデス高地で長期にわたる調査を実施するようになり、伝統的な農耕法などもわかってきた。

したがって、本書ではこれらの成果も参考にしながら、私自身がフィールドワークで得た資料をできるだけ取り込んで論を進めてゆきたい。

7 本書の構成

序論では、中央アンデスにおける農耕文化の先行研究を検討し、問題の所在を明らかにした。

第1章では、アンデスのなかでの中央アンデスの特徴を明らかにする。そのために、北部アンデスや南部アンデスと比較しながら、中央アンデスの気候や植生、地形などの特異性を検討する。とくに、中央アンデスはアンデスのなかで最も高地部でも多数の人口が暮らしている地域であるが、その理由を明らかにする。

第2章では、主として中央アンデスを原産地とする家畜や栽培植物の特徴を私の観察などをおして明らかにする。また、クロニカ資料を利用して、これらの家畜や栽培植物のインカ時代の利用方法なども明らかにし、その伝統と変容を追う。

第3章では、主として考古学的資料をもとに狩猟採集から食糧生産にいたる過程を追う。とくに、アンデス高地で最も重要なジャガイモについては、考古学的資料のみならず、植物学および農学的調査で得られた資料も利用してジャガイモの栽培化のプロセスを明らかにしたい。

第4章では、農耕の開始以降、インカ時代以前までの農耕文化発達のプロセスを主要な文化期ごとに検討する。モチェやナスカ文化については、土器に表象された様々な栽培植物を同定し、各文化期の農耕文化の特色を明らかにする。

第5章では、主としてクロニカの記録を分析し、インカ帝国の農耕文化の様相を明らかにする。この分析では、アンデス高地における2大作物のジャガイモとトウモロコシの栽培方法や利用法の違いも明らかにする。

第6章は、本書の中核をなす章であり、主として私自身によるフィールドワークによって得られた民族誌により、現在の伝統的農村社会の農耕文化を明らかにする。とくに本章では生産と消費にかかわる農耕文化に焦点をあてる。

第7章～8章は、農耕具およびイモ類の加工技術の方法をめぐって、中央アンデスにおける地域性を明らかにしようとする。

終章は、本書の全体をおして明らかになった根栽農耕の重要性に着目して、文化領域としての農耕文化圏を提示する。

